

新型コロナ禍での大規模修繕工事

住民、施工者側も最大限の注意を

新型コロナ禍は、連日新規感染者が続いているが、管理組合が事前に準備してきた大規模修繕工事をめぐって住民側、施工側とも感染者の発生に最大限の注意を払いながらの取り組みとなる。6月末、施工者団体のマンション計画修繕施工協会（MKS）は、工事の進め方にについて、「マンション計画修繕工事における新型コロナウイルス対策ガイドライン」を公表した。オフィスビルなどの建設工事については5月14日に、国交省が「建設業における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」を公表しているが、それのマンション版である。

千葉県下のある団地では、6月から10月までの予定で、窓サッシ、ガラスの交換工事を進めていく。新型コロナ感染が広がる中での工事で、住民の不安は募る。大規模団地だけに、住民が自費で工事を済ませた住戸もあるが、400戸を超える

大工事だ。
職人は8時には個々の現場に入る、9時には作業開始。新しい枠を調整し、はめ込む。この間、住民は誰かが在室しなければならない。窓を開け放ち、換気。既存のサッシを撤去し、床にビニールシートを敷いて養生する。職人はマスクをつけ、作業の前にはアルコール消毒。

この作業は、事前準備が必要で、部屋の荷物を移動する際、何をどこまで定例会議などで施工側は、管理組合、設計コンサルとの打ち合わせを行うが、ウェア会議やメール、電話など、できるだけ接触を避ける方法を検討するとされ、管理組合側がパソコンやスマート폰の扱いに不慣れな場合も予測されることから、一律ではなく、選択可能かそれらの複合による方法も検討する、としている。